



平田 オリザ

*Oriza Hirata*劇作家・演出家、
大阪大学コミュニケーション
デザイン・センター教授

栗本 智代

*Tomoyo Kurimoto*大阪ガス エネルギー・文化研究所
主任研究員

パブリックスペースにおける対話の可能性

昨年秋、京阪・中之島線の工事現場でファッションショーが開催され、「駅」というパブリック空間での実験として注目を集めた。その総合監修をされたのが平田オリザさんである。

劇作家・演出家としてはもちろん、言葉に関する著述やワークショップなど幅広い活動の中で平田さんは、新しい価値創造としての「対話」の必要性を主張されている。平田さんによると、「対話」(Dialogue)とは、他人と交わす新たな情報交換や交流で、相手と価値観をすり合わせて変えつつ新たな価値観をも創り上げることを目標としている。一方、「会話」(Conversation)は、既に知り合った者どうしの楽しいお喋りのことである。

ここでは改めて、パブリックスペースについて「対話」という視点から、お話をうかがった。

「セミパブリック」スペースという概念

栗本 「パブリックスペース」と一言で言いますが、いろいろな場所が考えられます。高層ビル間のちょっとした広場、劇場、神社の境内など、分類の仕方がいくつもあり、対話のありようも変わってくると思われま

平田 プライベートな空間では、例えば、ちゃぶ台を囲んだ親子などでは、会話は生まれますが、対話は生まれにくい。では、一般にいうパブリックなスペースの場合はどうか。梅田駅前が、人がすれ違うだけで対話は起こらない。対話を起こすには、「セミパブリック」な場所を選ばないといけない。

僕は、駒場という小さな商店街で育ちましたが、そこでは床屋や銭湯が昔からコミュニティスペースの役割を果たしていました。散髪している人の横で子供がマンガを読んでいて、おじいさんが将棋をさしている。駄菓子屋でも、いつも一〇円玉を握りしめてくる子供が、ある日一万円札を持ってきたら、店のおばちゃんは注意をしたり母親に聞いたりするわけです。

そういう点で、対話が生まれる「セミパブリック」なスペースという時に二つのキーワードがあります。一つは、共同体がある上でのパブリックスペースかどうか。二つめは、年齢、ジェンダー、人種や民族などの重層性があるかどうかということ。これが必要条件だと考えます。

対話が起こる劇場デザイン

栗本 劇場の場合はどうでしょう。野外劇場や小劇場、立派なクラシックホールまでいろいろありますが、

平田 大都市における商業的な劇場は、駅前と同じ完全なパブリックスペースです。都市の住民は隣の人と接触しないようにしますから、対話は起こりません。残念ながら日本では、静かに芸術を鑑賞しに行くだけの空間だと思われていますが、本来は劇場もセミパブリックな空間でした。

栗本 例えば小劇場の座布団を敷き詰めた客席や歌舞伎小屋では、偶然隣に座った見ず知らずの人とでも体をよせあつて舞台を観ることになり、「一緒に「わあっ！」と驚いたり顔を見合わせて笑ったり、出会いや対話が起こる可能性が高いですね。

平田 歌舞伎というのは、よくできたエンターテインメントです。通し狂言、例えば忠臣蔵でも、どこか必ず難しい話のシーンが出てきます。これは父親が子供に威張って蘊蓄を傾けるためにある。また昔の女性は、心中事件のようなゴシップや衣装・ファッションに興味があり、子供は歌や踊りと、全部の人が、重層的に楽しめるものでした。

栗本 今では一部の人が行きませんね。

平田 劇場自体は、やはり好きな人が来る空間なので、そんなにずっと対話している場所ではないと思います。ただ、例えばヨーロッパの劇場がいいのは、カフェとライブラリーを併設している。昼間からロビーに人がいたり、さつき観た演劇について深夜まで語り合っていたりする。そういう機能が劇場には必要です。

栗本 大阪でも、かつてあった「扇町ミュージアムスクエア」では、小劇場や映画館と並んで、多少は関連書籍やグッズが置いてある雑貨店があり、夜遅くまで営業しているカフェレストランも人気でした。これで扇町のイメージと人通りがかなり変わりました。

平田 日本には少ないですね。埼玉県富士見市の公共ホールで芸術監督をしていたのですが、この日当たりのいいロビーに、演劇関係の自分の本を持ってきて私設のライブラリーにしました。また年に一回障害者向けのワークショップを開催していますが、そうすると何も無い日でも、障害者の施設や作業所の人たちが、散歩のコースに入れたり、ロビーでお弁当食べたりする。そういう場所になっていけないといけないんです。その発想が日本の劇場にはなくて、演劇をやっていない時も、ロビーに人がいられるデザイン設計になっていないんですね。

良質の芸術文化施設が核になる

平田 井上ひさしさんが「イーハトーボの劇列車」という名作戯曲の中でこう表現しています。日本にはもともと他者が会おう「広場」がなかったと。街道が一本しかないから、百姓が一揆を起こしても侍に挟み撃ちされるとつぶされる。だから日本には革命が起こらないんだと。革命は広場から起こる。民主主義も、対等な立場で語り合う場がなければ成立しない。

栗本 でも日本には、神社や寺が、地域のコミュニティスペースとしてありましたね。

平田 そうです。司馬遼太郎さんの本を読むと、日本の農耕社会では、「会話」が中心で、四百語程度で暮らしていたのが、寺に行った時は八百〜千語くらいで話していたそうです。ただ、旅芸人や薬売りなど外部から来る人は宿場町までしか入れなかった。江戸時代は、純度の高い封建社会をつくるため、農村に新しい情報を入れないような政策をとったのですね。

栗本 都市の方が、人も情報も集まりパブリック性が高かったのですね。

平田 特に大阪は特殊でしたね。言語的にも、大阪で歌舞伎や浄瑠璃が発達したのも、まさに必要性があったからです。当時地方をまわる商人は、互いに意味が通じないことが多く、浄瑠璃の言葉を共通語として話していたそうです。ちなみに侍の共通語は狂言の言葉です。ですから、大阪の商人が、他人とコミュニケーションをとるために浄瑠璃を観ることは、必須の国語教育だったわけですね。

栗本 その一部分でも今日まで継承されていたら、大阪は随分変わっていったね。

平田 万博の成功体験があまりに大きく、外部からの集客型イベントに頼ってきて、オリンピックの誘致に失敗し、サミットも来ず、世界陸上は盛り上がり今ひとつという現状だと思うのです。今はどのまちも、同心円状にまず地元の人たちが楽しめる空間施設づくりに転換してきています。

栗本 観光業界でも、着地型観光に力を入れ始めていて、各地で、「ガイドブックに載っていない」プログラムを住民も一緒に開発しています。旅行者は、観光名所より地元の人がすすめる場所に強い関心を持っているという調査結果もあります。

平田 金沢が象徴的ですね。一時期観光客の数が半減したので、芸術村をつくり、現代美術館をつくって成功したわけです。大阪では「天満・天神 繁昌亭」がいい成功例ですね。周辺の天神橋筋はすごく元氣になりました。

栗本 神社が隣にありますから、デザインとしても面白いです。

平田 熊本の山鹿市では、昔ながらの「八千代座」という歌舞伎小屋を行政が復活させました。年間の集客数は五万人くらいです。でも温泉とセットにして売り出したことで、地域の人たちが、紙すきやろくろ、農業体験などいろいろ



なアイデアを出すようになった。

栗本 歌舞伎役者の坂東玉三郎さんの定期公演が行われていますね。全国から、玉三郎と芝居小屋を目当てに来た観光客に対して、地元の人よりも工夫されたわけですね。

平田 北海道の富良野ではもつと顕著で、観光客が、日本だけでなく中国、シンガポール、香港、台湾、韓国からよく来ています。

栗本 ラベンダー畑を見にくるのですか。

平田 旧国鉄のデイスカパー日本のポスターにラベンダー畑が採用されたことで火がついたんですね。ただ、地元の農家の方が、ラベンダー摘み体験とか香水工場の見学とかアイデアを出して、それが成功して周辺の農家もはじめたわけです。第一次産業から第三次産業になって。農家だけではやっていけない、そこに付加価値をつけていかないとダメだと認識しているわけです。

栗本 それは、今やどの産業でも生き残るため不可欠なことです。

平田 同じ土俵でなく、違う土俵でやるということと、そこに芸術文化の役割があると思うのです。一つコアになるような高度な芸術文化施設があると、それに触発されてまわりの人たちが、誇りを持っている自分の仕事に、さらに付加価値をつけていく営みが、波及効果として現れてきます。

栗本 住民も元気になり、賑わいにもつながるわけです。

対話を楽しむ空間としての駅



栗本 京阪・中之島線の工事現場、中之島公園内の「なにわ橋」駅周辺で昨年秋季イベントが行われ、地下を利用したファッションショーが話題を集めました。平田さんは、総合監修をされましたが、京阪電鉄の幹部の方が、新しい駅をつくりたいと相談されたのがきっかけとか。

平田 対話が生まれるようなセミパブリックな空間として、「駅」を考え

たらどうかという話をしましたら、大変興味を持たれて、実験的に何かできないかと。二〇〇六年に、地下でダンスパフォーマンス、地上でカフェをしましたら好評で、〇七年は、ファッションショーを開催することにしましたのです。

栗本 ファッションショーというのは、非常にコンテンツポラーリーな、現代性の象徴で、どんな層にも楽しめますね。

平田 でも、大阪大学の教授会でも京阪電鉄の幹部の間でも、アートやダンスの方がまだ受け入れられやすかった。「えっ？ 阪大が、なぜファッションショーをするんだ？」という反応なんです(笑)。

栗本 「場」の実験としても面白いのですが、現実的な意図はあったのですか。

平田 最終目標として、開業したら駅構内に「カフェ」をつくりたいと考えています。

よくあるカフェスタイルの店ですが、例えば夕方五時半から七時半だけ、スペースを区切って「哲学カフェ」や「サイエンスカフェ」として、テーマを決めて対話ができるような場です。北浜の真下で、証券マンや通勤客が通る中、毎日そこだけが何らかの議論をしている。「尊厳死について」とか「愛とは？」とか。

栗本 既に大阪大学の中で、対話ができる「哲学カフェ」を昨年から実施されていますね。設定テーマやコーディネートの方法、ファシリテーターなど、大学内で培った手法や人材が生かせるということですね。

平田 「金融工学」「熟年離婚」「化粧の仕方」など、テーマによって中年も〇しも来るはずですが、しかもそれが、ステレオタイプではなく、相互乗り入れていく。そういうソフトを大阪大学が提供していく。実は、大学でプロデュースやコーディネート講座を設けたところ非常に人気があり、人材を育成するノウハウは持っているのです。あとはそれを生かせる「場」をつつていきたいと思っています。

栗本 中之島にも実験で「哲学カフェ」を併設された時、大学内と違いがありましたか。

平田 基本は同じで、参加者は意見を言っても言わなくてもよくて、結論を出さないという概念です。ファシリテーターはいるけれど、教えるの

ではなく、必要なところで専門知識を出すというようにしています。

面白いのは、四〇代以上の男性。全く対話ができないんです。会社の上下関係でしか話したことがないから、「世の中ってものはなあ」と説教する。これはダメです。話しながら自分も相手も意見が変わっていくことに醍醐味があり、対話を楽しんでほしい。

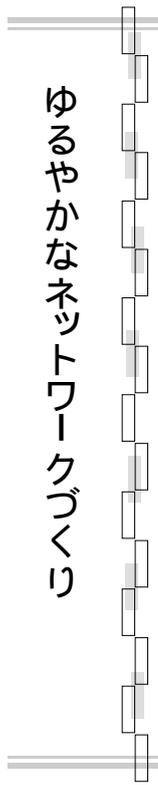
栗本 そんなカフェを常設する前段として、秋のイベントのファッションショーは、特別な打ち上げ花火のようなものだったのですね。

平田 京阪電鉄の社員の方々に、駅の新しい可能性を一緒に探っていくんだということを理解してもらったためのイベントでした。百人以上の社員が関わって、一番変わったのは、京阪の社員ですね。

栗本 最初は「なんでこんなめんどくさいことするんや」という顔をしていた方が…。

平田 もう率先してピラを配っていましたよ。工事現場の方たちも、みんな奥さんと子供たちを連れてきたりして。そこが一番変わりましたね。

ゆるやかなネットワークづくり



栗本 私が関わっていますのは、「コミュニティリズム」と銘打っていますが、地元の人がもてなす、まち歩きツアーを常に提供できるシステムや組織づくりです。個性豊かな案内人や選りすぐりのコースを考えるスタッフなど、人材育成も必要です。でもこれまでは単発イベントばかりで、持続させる視点がなかった。事業を継続していくため、金銭的にも黒字体質にするにはどうしたらいいか、という課題もあります。

平田 これは、社会的コストをどうとらえるかということと、行政や企業に対して粘り強く説得していかないとけないでしょうね。

特に若い人は、商店街のように、夏祭りや餅つきなど年間行事に参加を強いられるような強固な共同体は嫌なわけです。一方、専門性の高いものに対しては自分の好みに応じて自由に積極的に参加している。でも全員が何らかの形でその空間、共同体に何かを通じて参加していることが望ましい。私はこれを「ゆるやかなネットワーク」と呼んでおり、今、編みなおさないといけないものだと考えます。防災の面でも防犯の面でも、小さなコミュニティがある方が強いわけです。三〇人や五〇人規模の小さなプログラムをたくさん用意していくしかない。

栗本 これからの地域共同体を守っていくためには、採算がとれるわけではない。ただ、最初は公的なお金が入ってこない限り、採算がとれるわけではない。面的な広がりが出てきたら、最終的にコストダウンができません。ダムや堤防や警察官を増やすよりずっと安くすみ、またイベント型でなく常設のものにした方がいいということと、社会に受け入れてもらえるかどうかです。哲学カフェも、「なにわ橋」駅だけでなく、大阪の駅全体に広がって併設されたい、と考えています。

栗本 心の安らぎや連帯感が得られる常設の「場」があれば、犯罪もきつと減りますね。芸術・文化に関しては、特に関西では評価が低く、芸術文化に関わる人とそうでない人の距離を縮めて価値観をぶつけあう場が非常に少ないので、裾野を広げるチャンスになりそうですね。

平田 いろいろなメニューを用意することが大事だと思います。昨年と一昨年のイベントでも大道芸的なものを各所に用意してもらいました。それを見たあと、語り合いの場所へ入ってもらえたらうれしい。

中之島は、図書館や国立国際美術館など大きな資産を持っていますし、各所がアウトリーチをやりたいと考えています。それならば、国立国際美術館で展覧会がある時、それに関係するカフェを「なにわ橋」駅でやる。展覧会を見た人も見てない人も参加して、「じゃ、見に行こう

平田 オリザ (ひらた・おりざ)

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授、
劇作家・演出家、こまばアゴラ劇場支配人

1962年東京生まれ。大学1年で初の戯曲を執筆。82年に劇団「青年団」を結成。86年国際基督教大学教養学部人文科学科卒業後、自らが支配人を務める「こまばアゴラ劇場」を拠点に活動。その活動領域は、演劇をはじめ、教育や言語学にまでおよび、日本はもちろん世界からも注目を浴びている。舞台では、生活に基づく言文一致の新たな劇言語の創造に挑戦し続けている。95年には『東京ノート』で第39回岸田國士戯曲賞を受賞。

栗本 智代 (くりもと・ともよ)

大阪ガス エネルギー・文化研究所
主任研究員

1988年奈良女子大学家政学部生活経営学科卒業。大阪ガスに入社後、91年より現職。研究領域は、関西(特に大阪)の活性化をめざした都市の個性や魅力の探求など。“なにわの語りべ”としても情報発信をする一方、文化都市づくりのためのプロモーションやプログラムの充実に向けプロジェクトコーディネーターとして活動中。主な著書は、『大阪まちブランド探訪-まちづくりを遊ぶ、愉しむ』(創元社)、『大阪力事典』(編・共著、創元社)など。



か」「もう一回いこうか」という人も出てくる。中之島のあちこちで行われている事柄について、語り合う場所をまずはつくりたい。

栗本 京阪の中之島線については、駅名を決める委員会メンバーの一人として関わりました。中之島の土地性や歴史性を重んじ、水都としても価値を見直してほしいと、橋の名前が駅名に多く採用されています。

平田 ビジネス街であり、中之島という大阪を代表する歴史・文化資産が集積しているエリアだからこそ、いろいろな実験ができます。

栗本 会社帰りにふらりとカフェに立ち寄ると、自分の知見が全く通じない、よくわからない世界の話が繰り広げられていることもあるわけ

です。

平田 自分の言葉や考え方が全く通じないという体験をすることが大事です。それを強いられる現場が、今後国際化が進むと増えてきます。世の中には、異なる価値の人がたくさんいて、それでも私たちはコミュニケーションを何とかやっていける。異なる価値の人が多くいた方がコミュニケーションは活性化し、楽しいのだということに気づく機会になればいいと思います。

栗本 多様性のある社会に対応して生きていくには、大事な気づきですね。都市ならではのゆるやかな共同体づくりへの試みとしても、「駅」での新たな対話空間、楽しみです。

CEL